

# 生きて愛して死んだ

高橋玄洋

放送日 昭和36年5月28日

番組名 サンデー劇場

(日本電気、新日本電気)

制作 NETテレビ

演出 山本隆則

音楽 市場孝介

登場人物

野々宮井上孝雄

敦子奈良岡朋子

雪子松岡紀公子

正夫福島卓

村越下条正巳

医師仲田安部徹

園長園田若宮忠三郎

津田中原弘二

その他――

## 1 カメラ、周囲の山々をなめてゆく

### 2 山合いの岡

白木の墓標が立つ小高い処を背にして、村越茂が参列者に向って挨拶している。  
兄 (一歩進み出て) 私、兄でございます。最後迄お世話になりました皆様方に、故人野々宮敦子に代りまして、厚く御礼申し上げます。本日はまた、学園葬をもっておいとみなみ頂き、感激のほかございません。妹も、あの涙もろい目をしばたせて、さぞ感謝していることと存じます。学園のお小さい皆さん、あのダム之音を聞いて下さい。妹はあのダムと共に生き、あのダム之音の中に消えていった女でございます。あの音の続くかぎり、皆さんの御成長を見守っているのです。 (絶句し) 皆さん、どうかどうか……明るい毎日を送って下さい。

生徒に対して並んでいる園長、先生達、園医の仲田――

### 3 真新しい墓標

兄と仲田が登ってくる。

SE――風の音。

仲田 (遠くを見下ろし) 少し風は強いが、あの人には一番ふさわしい処だよ。

兄 そうだな、発電所と学園の屋根が等分に見下ろせる……。

仲田 これ、荷物になると思うが、持っていてくれ。

兄 ああ、これは……。

仲田 学園の子供達を書いた「お母さん」の顔だ……。

兄 彼奴は、学園でも「お母さん」と呼ばれてたのかね。

仲田 ああ、学園でも、そう呼ばせてるし、子供達も喜んでそう呼んだ。

兄 だからあんなに安らかな顔してられたんだな、苦勞はしたが倅せな奴だった。

仲田 うん。

兄、子供達の絵を見る。

○子供のつたない絵。

兄の声 敦子……お前の子供さん達を書いたこの絵をみるたびに、様々なお前を思い出すことだろう……この絵の中でお前は笑ってる……お前は泣いている……お前は怒っている。……

兄 有難くもらって行くよ。

仲田 (深くうなづく)

O・L

### 4 学園の一部 (その数日前)

SE――遠く、太鼓の響きが聞えてくる。

教師 若い教師が懐中電灯で照らしながら、兄を案内してくる。

教師 東京からいらして、よく……。

兄 ええ、慣れたもんです。

教師 前にもいらしたことがあるのですか。

兄 来た処じゃない、住んだことがあるんですよ……二十年も前ですがね。どうも

有難う。

敦子の家の前に来ている若い保母が戸を開けて招じ入れる。

## 5 寝ている敦子

兄が入ってくる。

仲田と園長がいる。

兄 (目礼し) やあ、どうしたい。

敦子 (枯れた声) あら、兄さん、来たの？

兄 来たのとはご挨拶だな。どうして知らせてくれなかったんだ。

敦子 だって、兄さん他所の人だもの……私は野々宮の人間よ。

兄 それだけへらず口たたける様じゃ、まず安心だ。

敦子 (弱気に笑って) おかしいでしょ、この年になって胸をやられるなんて。

兄 全く子供みたいな奴だ。

敦子 そんなに威張ってばかりいないで、兄さん、お礼申し上げてよ、さんざんお世話

かけちゃったんだから……。

兄 判つとるそれ位い……この通り、泣き虫野郎のくせに意地っ張りときてますから、

さぞご迷惑おかけしたかと思ひます。

敦子 御本人も聞いてるのよ。

兄 かまわんさ。

園長 どうも至りませんで……私、園長の園田です……こちら、学園の園医をしています

仲田先生。

仲田 暫く……。

兄 暫く……お世話になるね。

園長 ご存知でしたか。

兄 ええ、そののダムが出来る頃からの知り合いでしてね。

仲田 ダム工事の最中にこの人盲腸やってね、家の俎板の上で、藪が藪がって暴れ廻っ

たんですよ。

兄 事実、藪だった。

園長 さようですか、あのダム工事に……。

兄 四年いました。これの戦死した夫の野々宮とは大学が同じ土木の同級でしてね。

兄、仲田に目くばせして立つ。

敦子 先生を責めちゃだめよ、私が知らせないようにお願いしたんだから……。

兄 ああ、判つとる。

## 6 台所

兄と仲田、来る。

兄 (殺した声) どうも。

仲田 いや……君、あの太鼓を聞いて呉れ給え、学園の子供達がお母さんの病気を治

すんだといって、鎮守さまで祈ってるんだ。

兄 そうか。

仲田 あの人にはお祭りだと云ってあるがね。

二人、耳をすませて聴く。

仲田 ……どうだ、疲れたろう。(棚のコップをとり一升瓶を傾ける)

兄 相変らずアルコール持参だな。

仲田 そうだ、今夜は君は控えてもらおう。君O型だったナ、血液……。 (飲む)

兄 うむ、輸血が必要なのか。

仲田 実はあの人の本当の病名は……。

敦子の声 兄さん、何話してるの？

仲田 ……後でゆっくり。

兄 (うなずく)

二人、飲んで引返す。

## 7 居間

兄 失礼しました。

敦子 兄さん、心配いららないのよ。

仲田 それは医者の方の云うセリフだ。

敦子 ……あら、お飲みになったのね。

兄 ……すぐ詮索する、悪いくせだぞ。

仲田 久し振りに会ったんだからね。

敦子 用意のいいこと。園長先生、この人達、昔から一寸目を離すと直ぐこれなんです

……全く困った人達。

仲田 園長も一つどうです？

園長 私も一つ、困った人達のお仲間に入れて貰いますかな。

敦子 まあ、園長先生まで……。

園長 じゃ、例のお祭りの方が一寸気になりますんで。

兄 どうも、御苦労さまです。

敦子 子供達に、よく先生方の云うこと聞くように。

園長 それが、仲々云うこととききよらんなのでね。(立ち) どうぞ、もうそのまま……。

若い保母、お茶を持って入って来る。

兄 有難うございました……どうぞ先生方も……。

保母 はい……御食事は？

仲田 なあに、この人も米の汁があればいい方だよ。

敦子 吉岡さん、ほんとに、もうどうぞ……。

保母 ええ……それじゃ……。あちらの部屋で一寸休ませて頂きます。

保母、去る。

仲田も出て行く。

敦子 東京から来ると山は寒いんじゃない？ その押人れに炬燵が入ってる筈よ。

兄 相変らずだな、放つとけよ。

敦子 性質ね、私のおせっかい……到頭直らなかつた。

SEE—の音が聞え出す。

兄 あ、水門開けたな。

仲田 一升瓶をさげて入って来る。

仲田 懐しいだろう、久しぶりに聞くと……。

兄 音もこんなに近く聞えてたかナ。

仲田 まさかそこまでは変らんだろう、いくら世の中が変ったって。

敦子 こうやって独り寝てるでしよ、退屈するとシンが疲れるのよ、そこへあの音が聞えて来る……すると急に色んなことを想い出すの……今まで忘れてたようなことが、糸でもたぐるみたいに……考えてみれば、ここへ来て二十一年、いつも私達の生活の伴奏のように流れてたんだものね。

兄 二十一年……もうそんなになるかなあ。

敦子 そうよ、もう二十一年……ああ、今夜は大急ぎで総ざらいしなきやあ……兄さんに話したかしら、私ここへ来るって話があった時、野々宮にぶたれちやったの。

兄 そいつは初耳だな。

敦子、首をふって部屋の隅に置いてある古いオルガンを見る。

### ○ 広島の家（敦子の想い出）

M———ダムの音の中から、のんびりしたオルガンが聞えて来る、———菜の花畠に、いり陽うすれ……。

敦子（28）がオルガンをひいている。

SE———玄関の開閉。

野々宮、背広姿で入って来る。

野々宮 只今。

敦子 お帰んなさい。

野々宮、そのまま卓の前に坐る。

敦子 着替えないの？

野々宮 まあ坐れよ。（部屋を見廻し）この家とも愈々お別れだぞ。

敦子 えッ、東京に帰れるの？

野々宮 東京へ帰ったって仕方ないさ、ダム建設の現場へ行くんだ。

敦子 あの三次みよしの奥の？

野々宮 そうだ。今度は大変な仕事だぞ。中国五県の中でも一番大きい発電所を造るんだ……どうした？ 広島ひろしまの夕夙ゆふなぎから開放されるだけでもいいじゃないか。

敦子 それで、貴方、そのお話受けていらしたの？

野々宮 ああ、会社の命令だ。

敦子 会社の命令って、課長さん、津田さんじゃないの、何とかならないの？

野々宮 （憮然と）ならんね。

敦子 男の友情って案外当てにならないのね、学生時代あんなに仲良かったくせに……（奥へ）正夫ちゃんそこで何してるの？ もう少し外で遊んでらっしゃい……兄さんに手紙出して駄目？

野々宮 管轄が違うよ。お前そんなに嫌か。

敦子 雪子だって学校へ入ったばかりよ、可哀想じゃない田舎の学校……。

野々宮 ……。

敦子 ね、お嫁に来る時つくった訪問着だって、まだ一度も袖を通してないのよ。こんな田舎ばかり廻ってたら着る時なんかありやしない。

野々宮 それは時勢のせいだよ。

敦子 とに角、出張所生活はもうこりこり…。

野々宮 じゃ、俺一人で行くのか。

敦子 私、津田さんところへ行ってお願ひしてみようかしら…。

野々宮 馬鹿！（敦子の頬を打つ）

敦子 まあ！（頬をおさえる）

野々宮 ……お前、間違ったんだ。俺はドリルとセメントの中にしか夢を持ってん男だ。津田は今に部長から重役にまでなるだろう。しかし、俺は、仕事があれば、やり甲斐のある仕事さえあれば…。

敦子 貴方、津田さんのこと、そんな風に考えていらしたの？

野々宮 出世出来たぞ、あいつとなら…。

敦子 嫌、嫌、そんな…。（泣き崩れる）

フォーカスアウト

## 9 東京村越の家の庭先（その数年前）

生け垣越しに津田が来る（学生）

SEE—遠い省線。

津田の声 御免下さい！

津田 やあ敦子さん、兄さん居ますか？

敦子 ええ、野々宮さんも来てらっしゃるわ。

二人、庭から縁先へ。

敦子 兄さん、津田さんよ。

津田 敦子さん、おみやげ。

敦子 あら私に頂くの？ どうも有難う。

津田 その代り、と云っちゃ何だが、後で一吋ボタンを付けて下さい。

敦子 いいわ、丁度裁縫箱開けた処だから…。

兄と野々宮、出てくる。

兄 ようッ、上れよ。

津田 一寸つかまつてるんだ。

敦子 ……あら動いちや駄目よ。

津田 どうも、この胸は美人の顔を埋めた経験がないんでね…。一寸いいもんだな。

敦子 ま、お上手なこと。

兄と野々宮も縁先に坐る。

津田 一度聞きたいと思ってたんだけど、敦子さんの理想って、どんな男です？

敦子 私の理想？ そうね、まずゲーリークーパーみたいな顔して。

兄 それを新物喰いって云うんだ。

敦子 相当な財産があつて…。

野々宮 そこまでで、まず落第だな。

津田 野々宮、しよげるなよ。  
敦子 夏は伊豆辺りに別荘があつて……。  
兄 勝手な夢を見ておくさ……。行こう。  
敦子 あら、野々宮さん、又、この間の手拭ぶらさげてるのね、あれ程云つたのに……。洗ったげるからお貸しなさい。

敦子、野々宮の腰から手拭を引抜いて了う。

ワイプ

## 10 東京の家（その一ヶ月後）

兄、入って来て自分の机に向う。

兄 敦子！ 居ないのか！……敦子！

敦子、入って来る。

敦子 なあに！

兄 一寸、ここに坐れ。

敦子 何よ、怖い顔。

兄、立上り、歩き廻る。

兄 お前、野々宮と上野辺りで会つてるそうだな。

敦子 ……。

兄 どうだ、返事が出来ないのか。

敦子 ……。

兄 結婚の約束までしたつて聞いたが、本当か？

敦子 （意を決し）ええ。

兄 お前、何時からそんな不良になった。

敦子 自分のことを自分で決めたら不良なの？

兄 野々宮の家がどんな状態だか知つてて決めたのか。あの服装を見ても判るだろう。

あ奴は働きながら学校へ行つてるんだ。そう簡単に結婚なんか出来ないんだぞ。

敦子 勿論、卒業してからです。

兄 当り前だ。

敦子 自分で決めたことですから、責任は自分で持ちます。

兄 当り前だ。

敦子 私、野々宮さんが好きなんです。信頼出来ると思つたんです。

兄 クーパーにも似てないぞ、財産もないぞ……。勿論別荘もない。

敦子 そんなこと問題になりません。

兄 勝手にしろ

兄、怒って真新しいオルガンのフタを叩くように閉める。

## 11 寝ている敦子

オルガンから――

敦子 世の中なんて、何がどうなることやらね。

仲田 その結婚に反対した兄貴が、こうやって大きな顔して坐つとる。

兄 なあに、僕はこ奴が、自分で自分の進む道を決めたんだと云うことを自覚させて

やりたかっただけだ。

仲田 いや、歳月と云う奴は便利なもんだ。

兄 頼りにしてた兄貴がやっぱりこのダム工事に島流しとは、しかし驚ろいたろう。  
敦子 あの時、野々宮と結婚してなかったら……？ 朝、新聞でここにダムが出来たことを知っても、魚屋さんが来れば、もう忘れてたでしょうねえ。

兄 なに、新聞にも出なかつたさ、もう情報局と云うのが出来てたからな。

敦子 兄さん、落成式の日のこと覚えてる？

兄 覚えてるとも！ なあ。(仲田に)

仲田 シュークリーム踏ん付けの巻きか。

敦子 (想い出して) そうそう……。そんなこともあった。

## 12 同じ部屋 (昭和十七年)

部屋の飾りつけも大方出来て、敦子が雪子と正夫に手伝わせて食卓の用意をしている。

SE—ヒル花火。

遠いブラスバンド。

敦子 雪ちゃん、さ、早くそれ持って来て！ もう終るわよ、祝賀会……正夫、何してるの、もう動かしちゃ駄目よ。

正夫はすかして見てはガラスの線を一直線に直している。

正夫 直してるんだい！

敦子 先刻の大丈夫、出来るわネ。

雪子 大丈夫よ。

正夫 (窓辺に行つて) あッ、来た来た。

敦子 えッ……さ、隠れて隠れて。

正夫と雪子、次の間へ逃げ込む。

敦子、落度はないかと思廻す。

雪子 (扉を開け) お母ちゃん、私の花束がない！

敦子 えッ (覗いて) タンスの上にあるじゃないの。

SE—戸の開閉。

声 おい、帰ったぞ！ (等々)

正夫 (扉をそつと開ける)

敦子 駄目よッ、(あわてて背中で押える) ……どうぞ！ どうぞ上つて下さい。

野々宮を先頭に仲田、兄が入つて来る。みんな祝い酒に幾分酔っている。

野々宮 さ、上つた、上つた。

仲田 ほう、これは豪勢だぞ。

兄 とに角、もう一度乾杯だ。

仲田 乾杯！

野々宮 お目出とう！

兄 お目出とう、野々宮。(握手する)

敦子 お目出とうございます。(目頭を押える)



仲 田 奥さん、お目出とう。(握手)……あのダム完成には留守部隊の力も大きいですが……諸君、あの音を聞き給え、愉快じゃないか、僕は涙があふれて仕方がなかった。テープを切って、水がザツと流れ落ちたと思うとひんやりした風が吹き返えして来た。僕はあの工事に直接携った君達の心中を思っただけ……もう僕は……僕は……

野々宮 君は何でも大袈裟だよ。  
仲 田 大袈裟かも知れん……しかし僕は……ねえ君、あのダムから、電気が送られて、工場の機械を動かすんだよ、どんな田舎にも電燈をとすんだよ、いやそれだけじゃない、洪水を喰い止める、水田に灌漑する。田圃に米を作るんだ。

兄 ……こっちの云うことを皆云って下さいやがった。

敦 子 兄さん、先生に感謝しなきゃいけないわ。あの時、盲腸でいってたら……。

兄 ……なあに、他の医者に掛ってたら、ダムの完成は昨日になってたさ。

仲 田 よろしい！ その藪医者と握手しよう。

兄 握手々々！

野々宮 やれやれ、これは大変だ。

雪 子 (扉を小さく開き)お母ちゃん。

敦 子 (目でうなずく)

オルガンの処へ行く。

M——オルガンでマーチの一節をひく。

雪子と正夫、花束を持って静々と出て来る。

一同、呆気に取られて黙る。

二 人 (声をそろえ)お父ちゃん、伯父ちゃん、ダムのご完成お目出とう！(各々花束を捧げる)

野々宮 有難う、有難う！

兄 (受取って、ぐっと胸にくる)正坊、神妙な顔するなよ。(鼻の頭をはじく)

敦 子 このケーキは仲田先生からのお祝いよ。

兄 (正夫を膝に抱き上げ)どうだ、伯父さん、えらいだろう。あのダム、伯父さん

たちが造ったんだぞ。

正 夫 ウソだい、お父ちゃんが造ったんだい。

敦 子 そうだね、お父ちゃんが造ったんだわねえ。

兄 ……なんだ、親子共謀か。

敦 子 だって本当なもの、ねえ正坊。

正 夫 ウン。

仲 田 ハハハ。(面白がって笑う)

雪子、仲田と兄に酒をつぐ。

仲 田 おットトトト……雪子ちゃん、今日の祝辞の中じゃ、雪子ちゃんのが断然光つったぞ。……飯場の連中まで泣いとったぞ。〃国民学校六年生、野々宮雪子〃

兄 ……うむ、あれはよかった。

野々宮 〃私達と仲良しのダムの小父さん、長い間、本当に御苦労さまでした。お父さん達がこのダムをおつくりになるのに、どんな御苦労なさったか、私達はみんな知っています〃

兄 さては、親子合作だったな。  
仲田 雪子ちゃん、もう一度ここでやってくれよ。  
雪子 知らない！（走り去る）  
正夫 姉ちゃんいじめると、ブツぞ。  
仲田 おお、敵はここにも居た。  
野々宮 “どんな御苦労なさったか、私達はみんな知っています” か……雪子が入学の年  
だったからな、ここへ来たの。  
敦子 もう六年になるのね。  
仲田 六年間の血と汗の結晶だ。  
兄 どうだ、敦子、今度は東京へ戻れるかも知れんぞ。  
敦子 もう嫌よ、あんなゴミゴミした処……。  
兄 ……俺が引揚げてもか。  
敦子 え、子供達の成績が上るわ。  
兄 こいつ！……それにしても、津田の野郎、けしからんぞ。今時モーニングなんか  
着やがって……。  
野々宮 そうだよ。彼奴が花束を受けるってことがあるか。  
兄 そうだとも、このダムは誰が造ったんだ。お前や俺や、うちの若い者たちが汗水  
たらして造ったんじゃないか。  
野々宮 彼奴、俺に“やあ、御苦労だったね”って通り抜けて行きやがった。  
敦子 まあ、そんなこと云ったのあの人。

兄 俺には、それ程固い岩盤とも思えんがねって抜かしやがった。  
敦子 まあ。正夫ちゃん、何処へ行くの？  
正夫 姉ちゃんとか。（出て行く）  
野々宮 現場の苦労があいつらに判ってたまるか。  
兄 今日って目出度い日でなかったら撲ってやるところだ。  
野々宮 あいつも地に堕ちたよ、正に出世の虫だ。  
仲田 本社から来てた技術長とかって人だな。  
敦子 ええ、うちの人達の同級生なんですけどね……私、これから行って撲ぶってやろう  
かしら。  
兄 女の武勇伝か、おい。  
敦子 だって、シヤクじゃないの。  
野々宮 お前酔ったのか。  
仲田 奥さん、やるんならこの僕に委しといて下さい。仲田先生は、医者は藪医者でも  
柔道は四段だ。  
正夫 菓子箱を持って入って来る。  
正夫 お母ちゃん、知らない小父さんがこれをつて。  
敦子 知らない小父さん！（立ちかける）  
正夫 もう帰っちゃった、他にも寄る処があるからって……。  
野々宮 誰だろう。（箱の包みを開けてみる）どんな小父さんだい？  
正夫 モーニング着た小父さん。

夫婦 えっ?!

箱の中はシュークリーム。

野々宮 こんなもの、喰えるか!

敦子 そうよ、田舎に居たって、お菓子位い食べてるわよ。……私、踏ん付けてやる。

正夫 あッ!

踏み付けられる箱、野々宮と兄、慄然としている。

正夫 (泣き出す)

敦子 正ちゃんが泣くことないのよ、御免、御免、お母ちゃんが悪かった。

仲田 さあ、それじゃ、小父さんのケーキを切ろう、こっちの方がうんとうまいんだぞ。

敦子 さ、お姉ちゃん呼んでらっしゃい……仲田先生にこんな芸術があるとは知らなかったわ。

正夫、出て行く。

仲田 芸術とは恐れ入ったな。

兄 白状しろ。看護婦に殆ど手伝って貰ったんだろ。

仲田 冗談じゃない、あんな田舎者に、こんな芸当が出来るもんか。これも手術と同様、仲々どうしてデリケートな腕が必要なんだ。

雪子と正夫、入って来る。

兄 これも俺と同じ被害者か。

野々宮 正夫なんか見たことないだろう。よく覚えとけよ、デコレーションケーキって云うんだ。

仲田 さ、レディ・ファースト、雪子ちゃんがナイフを入れるんだ。

雪子 私、もう少し眺めとくわ。

兄 おいおい、おあずけか。

正夫 早く切れよ、……さあ。

SE——戸の開閉。

敦子 うちかしら。(立ちかける)

雪子 このナイフ切れないわ。

仲田 思い切ってブスッとやるんだよ。

雪子 だから、先生藪医者って云われるのよ。

仲田 こいつ!

雪子、ナイフを入れ、一同拍手する。

敦子、立ってゆく。

### 13 玄関

敦子、出て来る。

役場の書記が立っている。

書記 おにぎやかですな。

敦子 ええ、内祝いですの。

書記 ほう、もう御存知でしたか。(と赤紙を出す)

○徴集令状

敦子、ハツとする。  
書記 お目出とうございます……間違いなかつたら印を下さい。  
敦子 は、はい。

#### 14 居間

仲田 (切つて) さあ、取った取った。

正夫 僕これ!

敦子、入って来て奥の間へ。

正夫 なあんだ、パンか!

仲田 文句云わずに食べる、坊主。

雪子 おいしいわ。

敦子 ええ。(そのまま玄関へ――)

野々宮と兄、顔を見合せる。

敦子の声 御苦労さまでした。

仲田 どうだ、捨てたもんでもないだろう、まず配給のメリケンコ少々にだな。……(二人の様子に入口を見る)

敦子、戻って来る。

仲田 (顔を見比べ) どうしたんです、奥さん……。

敦子 い、いいえ、何でも……おいしそうね、頂くわ。

野々宮 敦子。

敦子 おいしいわ。……よかつたわねえ、正坊……。

野々宮 出せよ、来たんだろう?

敦子 (赤紙を出す)

野々宮 やっぱりそうか。

正夫 なあに? お父ちゃん。

野々宮 うん?……お父ちゃん、戦争に行くぞ。

正夫 (喜んで) わア本当?! 本当?!

仲田 お目出とう。(と、気が入らぬ)

敦子 とんだお目出とうになっちゃったわ……。

野々宮 おい、子供の前だぞ。

敦子 雪子ちゃん、良かったわネ、お父ちゃん、兵隊さんになるんだって……、旗を立てて見送るんだって。

仲田 奥さん。

敦子 だって、余ンまりじゃありませんか、ダムが今日やっと出来上つたと云うのに……。

兄 それは違うよ、ダムの仕事があつたから今まで延びたんだ。逆なんだよ。でなかつたら、もつと前に来ていたさ。

敦子 じゃ、兄さん達は、こうなること、知つたの?

野々宮 そうじゃないさ、だけど他の現場でもよくあつた例なんだ。

敦子 それを知つて、私にだけ黙つたのね、私だけが何も知らずに暢気にダムの完

成を待ってたのね。

野々宮 おい、いま日本は戦争をしているんだぞ。

敦子 判ってるわ、それ位い……。

野々宮 判ってたなら何も云うな、吾々の間だって、誰も口に出しはしないんだ、そんなこととは……。

兄 今度の仕事だって、戦争のため突貫工事やったんだ。

敦子 貴方たち、みんな自分にウソを云ってるんだわ。自分を誤魔化してるんだわ。

兄 歯を喰いしばってるんだ。歯を喰いしばって戦わなきゃならんだ、今の日本は……。

野々宮 (子供達に) お母ちゃん、おかしいな、泣いたりして……さ、雪子、オルガン弾いておくれ。

雪子 ウン。

正夫 僕、金ちゃんに云って来る、お父ちゃん戦争に行くって……。

正夫、飛び出して行く。

雪子、オルガンに向い弾き始める。

M——あーあ、あの顔であの声で

手柄たのむと妻や子が……

ちぎれる程に振った旗……

敦子、涙をこらえて台所へ駆け込む。

## 15 台所

敦子、来てうづくまる。

暫く——

そつと勝手口から出る。

SE——ヒル花火、オルガンにあわせて歌う合唱。

O・L

## 16 周囲の山々

次第にぼけてゆく。

F・O

## 17 寝ている敦子

敦子 シュークリームを持って来てくれたのが、津田さんじゃなくなつて、事務所のお爺さんだと判っても、もう笑うに笑えなかつた。

兄 あの爺さん、今どうしてる？

敦子 もう、とうの昔……十年にもなるかしらね。栄養失調って病気が流行した頃だから……そうですね、先生。

仲田 (飲んで) そうです、皆、僕ン処の患者です……どうだね、注射しとこうか。

敦子 フフ、先生、旗色が悪くなったもんだから……。

仲田、注射の用意をする。

敦子 戦争なんて、何処か遠いところでやってるんだと思ってたのに……あの日急に私の処にやって来ちゃった……。

兄 少し休んだ方がいいよ……。

敦子 兄さんこそ、横になったら……汽車の中、坐りづめだったんでしょ。

兄 近くなったものさ、昨夜東京を発ったら、今朝は広島だ。

敦子 東京も変ったでしょうね、野々宮送って行ったの、あれが東京の最後だった。

兄 家に一ト月位いかな、あの時は……。

敦子 そう、夏休みだったから……帰って見たら、野々宮の知らせが先に来て待つてたのよ。

兄 残念だったろうさ、戦争もしないうちに輸送船で沈められたんじゃ。

敦子 私、嫌いよ、あの役場の人……何時も私達の運命狂わすんだもの……。

仲田 あの人恨んだって仕様がな。

敦子 だけど嫌い……道で会ったら急いで逃げたわ。……二年、三年……（敦子、次第に自分一人の世界に入っていく）雪子も正夫も広島島の寄宿舎へ入っちゃって、私は一人この村にとり残されちゃった、そしたら正夫が母ちゃん寂しいだろうって、仔犬のジョニーを貰って来たの……本当は、あの子、自分の弟が欲しかったのよ。

## 18 台所（昭和二十年七月）

敦子（35）と雪子が坐って豆をむいている。

SE——犬が訴えるように吠える。

敦子 あッ、きつと正夫ちゃんよ。

正夫、勝手口から学生姿にリュックサックを背にして入ってくる。

敦子 お帰りなさい。

正夫 只今……ジョニー随分大きくなったね。

雪子 お母さん困ってるのよ、ジョニーに……。

正夫 どうして？ 母さん……。

敦子 お前達のお米の通帳が出て行って、母さん一人分になっちゃったでしょう。

正夫 あんなに大きくなるとはなア。

敦子 お腹すかしてるの、見て見ぬふりも出来ないしね。云って聞かせたって、ジョニーじゃねえ……ねえ何処か、貰ってくれる家ないかしらねえ。

雪子 今時、そんな家ないわ……正夫ちゃん、ダムの向うに捨ててくるのね。

正夫 捨てられるかい、あんなになつてゐるのに……。

敦子 御迷惑だらうけど、仲田先生にお願いしてみようか。

雪子 お母さんは、何かつていうと仲田先生ね。

敦子 そういふわけでもないけど、他に……。

雪子 仲田先生は一体、うちの何なの？

敦子 何なのつて昔から……お父さんの……。

雪子 お父さん、名譽の戦死じゃないの、みつともないわよ、お母さん。

敦子 まア何てことをいうの、この子は……。

雪子 私、嫌いよ、あの先生……正夫ちゃん、捨ててくるのね、ジョニー。

正夫 姉ちゃんの冷血動物！……いいさ、僕が何とかするから……姉ちゃんの世話にはならないよ、なんだ。

正夫、又、勝手口から出て行く。

正夫の声 ジョニー、ついて来い!

敦子 正夫ちゃん、どうするの?……正夫ちゃん!

敦子も、外へ出る。

## 19 周囲の山々

敦子 あの頃は、みんないらしてたのよ。ダムの上をジョニーが先に立って走っていた。真夏の太陽がダムの水にキラキラ痛いようだった。あの時が、あの子の最後の土曜になったのね。……仲田先生あの時は歩きましたねえ……煙のくすぶる広島街を三日間も歩き通しに歩いたんだものね。そして、もしやと思って帰って来たの。

## 20 家の表(昭和二十年八月)

敦子と仲田が疲れ切った足どりで帰ってくる。

仲田 (ハッとして) 奥さんッ!

そこに、焼けただれた雪子の靴が片方投げ出されている。

敦子 あっ、雪子!

敦子、駈け込む。

## 21 玄関

駈け込む敦子。

## 22 居間

敦子、駈け込む。

そこに靴を片方履いたままうつ伏している雪子。

敦子 雪子ちゃん!

雪子 お母さん、さわらないで!

敦子 えっ。

雪子 私の体、電気が流れてるの。

敦子 えっ電気?……。

雪子 電気で焼かれたから電気がうツてるんだって……。それに痛いの、触るととっても痛いの……。

敦子 でも雪ちゃん……。 (抱き起そうとする)

雪子 痛いッ!

敦子 (雪子の顔を見てハッとする) でも雪ちゃん、この儘じゃ……先生、雪子を何とかしてやって……何とか……。

立ちつくす仲田。

仲田 とに角、体を拭こう。(ガーゼの用意をする)

雪子 いいのよ、じっとしてればそんなに苦しくはないの……。正夫ちゃんもだめだったのね。

敦子 雪ちゃん、しっかりするのよ。

雪子 正夫ちゃん達の学校、勤労奉仕に行くんで、御幸橋の袂に集合してたんだって……逃げてくる途中で聞いたわ。

敦子 ね、先生、どうしてやればいいの、どうしてやれば……この子……。

仲田 判れば、それが判れば黙って手をこまねいてなんか……（自分に）なんて不様な！

雪子 お母さん、何か着るもの掛けて、私恥かしい。

敦子 ハ、はい。（奥へ去る）

雪子 仲田先生、長い間有難うございました。

仲田 何を云うんだ……雪子ちゃん、小父さんこそ謝まらなきやならん、医者<sup>イサ</sup>の僕がどうしていいか判らないなんて……雪子ちゃん、済まん（男泣きに泣く）済まん！

雪子 先生、お母さん、お願いします。

敦子、振袖をもつて帰ってくる。

敦子 雪子ちゃん。

雪子 お母さん、雪子悪い子だったわ、……御免なさい、変な風に想像したりして……。

敦子 何をいうのよ。

雪子 私、お母さんに会って一言<sup>ひとこと</sup>それが云いたかったの……それで帰って来たの。これ、お母さんのお振袖ね……嬉しいわ、雪子お嫁入りするみたい……お母さん、泣いちや嫌よ……そうそ、雪子、お話してあげるわ……さ、涙ふいて……昔々ギリシャの国のお話よ、あるお城に、とてもとても美しい王子さまがいたの。その王子さまに、お姫さまをお迎えすることになって、若い侍大将が街へ娘を探しに出掛けたんですって……その日

は空一杯に鬨雲が拡がったので、その侍大将は……まず一番に……。

仲田、たまりかねて窓辺に立つ。

窓外はぼつんと一つ夏の雲が浮んでいる。

敦子の声 お嫁に行くあの子に、お化粧してやるのを、いつも楽しみにしていたのに……。

顔まで崩れて、死化粧もしてやれなかった。……だから、野々宮が買って呉れた古い香水の小瓶を、あの子の小さな胸に入れてやったの。

### 23 ダムの上（その九日あと）

敦子、放心した様に見下ろしている。

子供達、走って来る。

子供1 （覗き込んで）小母さん、何見とるんや。

子供2 チエッ、何にもなアじゃないか。

敦子 あんた達、何処から来たの？

子供1 広島！

敦子 ああ、お寺の学童疎開ね。

子供2 小母さんも広島か？

敦子 （首を振る）

子供1 もうすぐ広島へ帰れるんじや、のう。

子供2 うん！

先生の声（OFF）こら！誰だ、ダムへ行ってるのは……。



子供達、走り去る。

敦子、ぼんやり見送る。  
間。

仲田が自転車をひいてやって来る。

仲田 (汗をふき) 矢っ張りここでしたね。

敦子 (振向くが無反応)

仲田 今お宅へ行って見たら、お留守だったから……きつと、ここだろうと思って。

敦子 他に行く処はありませんもの。

仲田 (子供達の去った方を見て) 可哀想に……。

敦子 ……?

仲田 あの子達の町は、爆心地に一番近い処なんですよ。

敦子 まだ何も知らないのね。

仲田 おそらく半数以上が両親を失ってるでしょう。

敦子 私も、代れるものなら代ってやりたかった……。

仲田 何を云うんです、奥さん……。

敦子 何か御用でしたの？

仲田 奥さん、戦争は終わりましたよ。

敦子 エッ？

仲田 戦争が終ったんですよ、先刻放送で……そう云ったそうです。

敦子 (無感動に) そうですか、終ったんですか。

仲田 国破れて山河あり……こうやって眺めてると、何にもなかったみたいですね。長い間の戦争も、新型爆弾も……。

敦子 遅いわ、今更ら……。

仲田 ……。

敦子 こんなことのために、私から何も彼も、取上げて了うなんて。

仲田 お察しします。……でも奥さん、貴女のすることがこれで無くなったわけじゃない。

敦子 もう何にも無いわ。

仲田 そうでしょうかな。

敦子 私は私なりに、野々宮を、雪子を、正夫を愛して来たつもりです。それなのに、皆、私だけを置いて行ってしまったわよ。

仲田 貴女は一生懸命愛して来たとおっしゃる、が、果してそうですか。

敦子 私が至らなかつたせいだとおっしゃるの？

仲田 夫や子供を愛するのに誰も一生懸命にはなりませんよ。貴女だってそうです。人間て奴は元々そう云う風に生れついているんですよ。

敦子 そうね、ただ当り前のことをして来ただけかも知れない。でも、もうその当り前のこともしてやれない……仏壇の御飯は何時まで待っても一寸も減らない……。 (目頭を抑える)

仲田 女の貴女が、愛する子供を失った真空状態は、僕にもよく判ります。しかし、奥さん、貴女は野々宮君や、子供達を愛して、それによって貴女自身報いられることを願

っていたわけじゃないでしょう。

敦子 ……。

仲田 冷い言い方だが、それが愛するものの宿命だと僕は思うんです。

敦子 濟んだことは仕方がない。…：諦めろとおっしゃるの。

仲田 それでも愛さずに居られなければ、泣いてやるより仕方ないでしょう。

敦子 泣いてやる？

仲田 そうです、泣いてやることです。…：野々宮君は無念の想いを抱いて、海の底に沈んだかも知れない…：正坊は焼けあとの何処かで誰にも知られず死んで行ったかも知れない。しかし、貴女が生きている限り貴女の中には生きている。野々宮君も正坊も雪子ちゃんも、少くとも貴女の中にだけは生きていられるじゃありませんか。

敦子 (初めて虚脱状態から覚めたようにワツと泣き伏す)

仲田 (じつと敦子を見て)…：僕が何故こんな山の中へやって来たかお話ししましょう。

敦子 ……。

仲田 僕は昔女房を手術の失敗から殺したのです。ほんの一寸した手違いからでした。しかし、医者としてこれ程つらいことはありません。死のうと思つてやつて来たのです。それより他に女房に謝る道はないと思ひ込んでいたのですね…：私も若かった。だが、医者の居ないこの村まで来て、自分が死んだ処で女房の死が報われるもんじやないと云うことがやつと判つて来たのです。失敗した経験を生かすことより他に女房が浮べるすべはないと…：奥さん、人間死ぬよりつらいことはいくらもあるもんですよ。

敦子 (仲田を見る)

仲田 (内ポケットから封筒を出し) これは破りましようね、無断で見つて御免なさい。

敦子 ……。

仲田、手紙を破つてダムの下へ散らす。

仲田 僕は雪子ちゃんを目の前にして医者として、何にもしてやれなかった。今もつづく無力な自分を知るばかりです。でも雪子ちゃんの死は決して無駄には出来ない…：ね、奥さん…：考えてみて下さい。もう一度生きることを考えて下さい。

敦子 ……。

仲田、敦子をかばうように引返す。

## 24 家の表(その一ヶ月後)

子供達がしゃがみ込んで遊んでいる。

## 25 居間

園長と仲田が敦子を説得している。

園長 私も終戦を迎えて、いざ広島へ引揚げる段になって、つくづく考えたのです。その結果何処にも引取り手のない十八人の子供達、これを俸せに育のほしてやるには、ここへ残るのが一番だ、それより他にはないと考えるようになったのです。…：二人のお子さんを二人まで亡くされた貴女に、お手伝いをお願いするのは折角、忘れかけておられる苦い経験を思い起させるようで、或いは大変残酷なことかも知れませんが、

お心の持ち様によつては、亡くなられたお子さんが生れ変わったとも考えて頂けるんじゃないかと……。

敦子 人間で、そんなに簡単に忘れたり、生れ変わったり出来るもんでしょか。

仲田 出来るんじゃない。生れ変わらせるのです。生れ変わらそうと努力するんです。

敦子 貴方がたは、御自分のお子さんを亡くした経験がないからそんな風におっしゃれるんです。

園長 それはそうかも知れません。しかし、吾々大人は、兎にも角にも一人で何かと生きています。子供達にはそれが出来ない。母親の愛情のささえがあつて、やつと育つていくのです。そこを考えて頂きたいのです。

敦子 私に母親を御期待になつても、もう駄目ですわ。

仲田 何故です。奥さん？……僕は貴女以上にあの子達の母親になれる人は居ないと思いますよ。

敦子 仮りに自分の子供でももう嫌です。もう一度あんな想いをするのは……嫌です。

園長 人が居ないと云うだけなら他に当てが無いわけでもありません。でも、うちの子供達に必要なのは、その、悲しんでくれる、一緒に泣いてくれる「お母さん」なんです。お願いします。

敦子 お母さんって随分便利なもんですのね、お腹痛めて生んで、生まれたら可愛がつて、可愛がつて結局泣かされるだけ、もう御免です！

間――

仲田 貴女は自分の子供でももう嫌だとおっしゃる、それでいてこの土地を離れようと

なさらない。……それは矢張り貴女が今も雪子ちゃんや正坊のお母さんだと言う証拠じゃありませんか。その気持ちをお母さんを失ったあの子達に振向けてやつて貰い度いのです。

敦子 ……。(かたくなに黙つて横を向いている)

その窓辺にそうつと子供達の顔がのぞく。

が、敦子が見ているので直ぐ引込む。

仲田 僕はその方が貴女の為にもいいと思うんです。一人こんな家で亡くなった人達のことを考えていても雪子ちゃんだって、正坊だって決して喜びはしないと思うんですがね。

子供達、又恐る恐る首を出す。

園長 (気付いて) ころころ。

子供1 先生まだ？

子供2 早く帰ろうよ、先生！

園長 もう少し待つておいで……お家の中へ入っちゃいかんと云つたでしょう。先生は今大切なお話なんだから……。

子供達 ハイイ。

敦子 いいの、いいの……いらっしやい。……上つてらっしやい！

子供達、はにかんでいるが、一人走るともう一人も一目散に玄関へ廻る。

仲田と園長、顔を見合せる。

敦子 先生……よろしくお願いします。

園 長 えッ、引受けて下さいますか。

子供達、飛込んで来るがそこで止まって下さい。

敦 子 いらっしやい、小母さんの膝にいらっしやい。

子供達、もじもじする。

仲 田 行くんだよ、小母さん処へ……。

子供達、少し前へ出る。

仲 田 もっともっと。

園 長 いつもの元気はどうした？ 俊坊どうした！ 健太どうした！

子供達、又少し出る。

敦 子 いらっしやい！……さあ、いらっしやい！

園 長 俊坊に健太、小母さんがだっこして上げようって……。

敦 子、いとしさにたまらなくなり飛び出して行って両手に一人ずつかかえ込む。

敦 子 御免なさい、小母さん悪かった、悪い小母さんだったわ。（涙声になる）

## 26 寝ている敦子

敦 子 石川健太君はどうしてるかねえ。うまく行ってるのかしら……。

仲 田 大丈夫、もう一人前のサラリーマンだ。心配いらぬよ。

兄 取越し苦労だからな、こいつは……。

敦 子 仲田先生には、本当に始めからおしまいまで、お世話になりっぱなしでしたね。若い教師が入って来る。

仲 田 今からもお世話をかけるくせに……（兄に）あッ、この先生が、今話した俊坊ですよ。

教師 えッ、何ですか？

仲 田 いや、こっちの話……。

敦 子 あの頃は可愛い坊やだったのに、ハハハ……。

教師 嫌だなあ、何だか知らないけど。

仲 田 まッ、一杯やれよ。（目顔で兄をうながして立つ）

## 27 台所

二人来て——向い合う。

兄 ……。

仲 田 矢っ張り云っておこう……あの人の病気がねえ。

兄 ……胸じゃないのか？

仲 田 俺がついて唯の胸ぐらいで殺すもんか。

兄 じゃ？

仲 田 白血球が馬鹿に多いんだ……雪子ちゃん達を探して歩いた、あの時に受けた放射能が今になって……。

兄 そうだったのか、じゃ君も？

仲 田 輸血は出来ん体だ、頼む。

兄 （うなずく）うむ。用意してくれ。

28 寝ている敦子

兄と仲田、戻って来る。

SE——ダムの水音止る。

敦子 あつ水門が閉った。……子供達は どうして居るでしょうね。

教師 あの通り元気に太鼓をたたいてますよ。

敦子 まあまあ、もう寝る時間なのに。……ああ私は やつぱり……あの子達に別れられない。ねえ先生、私が居なくなれば又、あの子達は母親をなくすんですもの。

仲田 (用意をしながら) 奥さん、そんな弱気を出してどうするんです。元氣を出して、もう一度あの子達のお母さんになってやるんですよ。

兄 そうだとも、これからじゃないか。

敦子 いいのよ、兄さん……氣安めはおっしやらないで、私もようやく自分のことだけはわかる歳になりました。でも、もう大丈夫、この世で果たせなければ、鬼になっても、あの子達を守ってやります。

仲田 奥さん！(いとしそうに、敦子の手をとり、腕を撫でる)

兄、上着を脱ぎ、腕をまくりながら、窓辺に立つ。

教師の声 先生！ 野々宮先生！

29 黒い山々

敦子、ガックリする。

30 睨みつける様な敦子のマスク

SE——相変わらず太鼓が鳴っている。

O・L

31 岡の上(その数日後)

墓標の前に立つ仲田と兄。

兄 いい奴だったよ。

仲田 あの人は、この世に人を愛するために生きて来たようなものだったよ。愛して、報いられることを知らない女の愛情を……それでも、尚、愛さずには居られない女の宿命をつつましく生きて来た人だったよ。

兄 それが女としての最も不幸な境涯に身を置いて初めて、人の母として生きる栄光を与えられたとはね。

仲田 (うなずき) 生きて愛して死んだ女、ここに眠る。

児童の書いた絵が風にパラパラめくれる。

SE——後はただ風だけが瓢々と鳴っている。

立ちつくす二人。

空には、今日も白い雲が浮んでいる。

(終)